

# 松江藩医学校教授山本家の事跡

田 籠 博

## 0 はじめに

本稿は地方における本草学の展開の模様をうかがう一例として出雲松江藩医学校「存濟館」教授を三代にわたって務めた山本家の事跡を辿ったものである。『雲州採葉記事』の著者簡齋館良臣の調べを機縁とするが、山本家に關する基本的な事実すら曖昧で、著作の多くが未紹介であり、先行研究で明らかにされた事実の中にも不十分な点が見出される。未見の書も少なくないまま筆者自身が調査した関係文献の記事をここに纏めておく所以である。

基礎的事項は松江藩の公式史料『列士録』（松江県立図書館蔵）に基づくが、『島根県史』第九卷「藩政時代」下（昭和5年）、『日本教育史資料』第五卷にも記事がある。先行研究には米田正治氏『島根県医学史覚書』1～6頁（報光社、昭和51年）と佐野正巳氏『松江藩学芸史の研究』314～326頁（明治書院、昭和56年）がある。特に佐野氏が見出された山本家菩提寺である天倫寺過去帳の記事は貴重である。

## 1 初代 山本逸記

初代山本逸記は名は良克、字は礼夫、葆齋と称し、彰経先生とも呼ばれた。「館」氏を用いることもある。逸記と存濟館について『島根県史』九卷は次のように記す。

序に国学并本草学者山本逸記を付載す、逸記は美濃の人にして京に於て小野蘭山浅井図南に師事し三十歳にし

て郷里に帰り医を開業す、後復京に入り小野家の子弟を教授し傍ら医を業とせしが享和二年松平治郷に聘せられ同四年二月松江藩に禄仕し式拾人俸を受け表医師に列し居宅を賜ふ、因て之を書院として教授す、文化三年藩主学規十一條を下付し且つ藩主自筆の扁額及神農像の大軸を下付す之より該院を存濟館と称す(492〜493頁)『烈士録』の記事は次の通りである。(句読点、傍注は引用者による。以下同じ。)

元祖 山本逸記 本国不知／生国山城

一 享和三癸亥年三月十九日、御国江被為召呼、医学教授可仕旨、於京都御屋敷被仰渡候。同四月、雲州江參着。同五月十六日医書講釈等相勤候。

一 同四月子年二月廿九日、被召抱、式拾人扶持被下候。御医師並被仰付。同四月、奉願上京家内召連。同五月、帰。

一 二男 周平、文化十一甲戌年十月十六日、京都高倉夷川上ル町ニ居在医師久保春塘養子ニ如奉願被仰付。一 文政四辛巳年二月朔日、於出雲死。

存濟館に關しては『日本教育史資料』巻五に記事がある。

存濟館ハ初メ旧藩主松平治郷ハ不昧ト号ス医学教授ハ漢方ノ為メ山本逸記ヲ聘スル時賜リシ書院ナリハ藩士今村佐右衛門元宅地。文化三年初メテ存濟館ノ称ヲ得タリハ山本逸記行事中ニ詳ナリ。

右の「山本逸記行事」なる書の所在は知られていない。

逸記の著作は『穴法記聞』『黄帝内經抄略』の二書が残っている。『穴法記聞』は京都大学中央図書館富士川文庫に写本二種があり、各々内容を異にする。仮にA本、B本と呼ぶ。A本は次の題言を備える。

穴法記聞題言

經曰經者所以能決死生処百病調虛實不可不通又曰灸刺之道及氣穴為定蓋人身所有之百六十五穴者玄氣通乎經脉只為虛実補写之枢紐必矣是以為鍼灸者必需經穴苟不明經穴只補写失法治療誤規可嘆哉所以吾<sup>?</sup>引鍼灸者明經穴而皮構治療之則譬之兵家之效陳法待敵也自先師東菴先生師弟相伝藏搜穴窺經秘訣者由来遠矣為是故于

今<sup>?</sup>之夏家于雲藩行訓導<sup>?</sup> 向者課口授搜穴法因二三子請錄氣穴在經之次病加之拳師說奧秘旁選諸家說問亦記一二愚攷与之衆子云

見返しに識語

癸亥秋日

于雲藩官寓

平安医学正脉山本良克撰

がある。經穴の異名(一名)や主治を述べ、時に「克按」として自説を記す。総て漢文である。「癸亥秋日」は享和3年秋、松江藩へ赴任して早々の著作となる。

B本は「釈名・考文・啓発・触伸・取法・主治」など記事がより整備されている。題言はなく、内題に「穴法記聞 穴次依十四經發揮」出雲藩家医学教授館良克字 男良阜補校」と記すように、逸記の子良阜、即ち二代山本安良の手が加わっている。巻末に安良の跋文があるものの伝記的事実は存しない。「良克曰」および「良阜曰」として説があるから、寧ろ安良の編著と見るのが適當かも知れない。

『黄帝内經抄略』にも二種の写本がある。松江日赤病院医学図書室蔵本は佐野正巳氏の発見に係る。題箋には元「黄帝内經抄略」とあったらしく(現在は剥落して見えず)、扉に「雲藩医学修定／黄帝内經抄略八十一章／本衙珍藏」、次に「先師凶南勝子嘗語生徒曰」で始まる序文(漢文)を有する。全文が佐野氏の著書に紹介されている。<sup>本々</sup>序末に

文政龍飛初元歲戊寅之九月九日

出雲藩特聘医学教授美濃館良克礼夫敬識于松江官寓之從容葆齋中皆歲七十又六  
とあり、内題は次の通り。

黄帝内經抄略

出雲藩特聘医学教授美濃館良克礼夫述

男良阜景岐較

表紙に墨で「官本」と大書するから、存濟館の教科書であったと佐野氏は見えておられる。最後に安良の跋文がある。

右鈔略八十一章家嚴彰經先生所賞筆錄以藏于家要亦資于医俗二家之佩服受用盖雖一冊子乎古聖宝訓縮在于茲吾人弗可弗晨夕諷誦亦在于茲良阜近者以校遺書而自在迺首恥斯書授之児良臣使其繕錄以備挿架意盖行將鍊校以公諸世也且附是言以作左券云不肖男良阜謹識

松江日赤本と同内容の写本が武田科学振興財団杏雨書屋にある。題箋は『内经抄畧』とあり、「存濟館」用箋に記されている。松江日赤本の序文には訓点がなく、本文の各所に抹消・訂正が見えるのに対して、杏雨書屋本は序文に詳細な訓点が施されているほか、本文の訂正箇所も稀で清書本と思われる。

本書は文政元年（一八一七）に逸記の説を安良が纏めたのが原本であるが、跋文により現存本は三代泰淵（良臣）の修補「児良臣使其繕錄」を経た後年のものであることが分かる。

以上の資料から逸記に関する事実が多少明らかになる。

文政元年（一八一八）の『黄帝内经抄略』序文に76歳と記すから、逆算して寛保3年（一七四三）の生まれとなる。生国は『烈士録』に山城、『島根県史』は美濃として一致しない。序文冒頭の「先師凶南」とは『島根県史』にいう浅井凶南（惟寅、一七〇六〜一七八二）であろう。凶南は京都で医を業とし、宝曆3年（一七五三）父東軒の跡を嗣いで尾張藩の藩医となった（『国書人名辞典』）。入門が京都時代だとすれば逸記は11歳まで凶南門で医学、本草学を学び、後に「東菴先生」（『穴法記聞』A本題言）に学んだのであろうか。『島根県史』には小野蘭山（職博、一七二九〜一八一〇）にも学んだと記し、「三十歳にして郷里に帰り医を開業す、後復京に入り小野家の子弟を教授し傍ら医を業」としたか否かは傍証を得ていない。特に本草学者、名物学者として著名な蘭山の私塾衆芳軒には全国から門弟が集まっていたから、「小野家の子弟を教授」云々は何かの誤りであろう。なぜなら、松江藩仕官以前の生活状況について『黄帝内经抄略』序文で自ら次のように述べているからである。杏雨書屋本の訓点に従って読み下し文を示す。

良克時二命処士ヲ以テ平安ノ市ニ寓居シ、賃居ヲ埃壙ノ中ニ占ム。上ミ恒禄撫循ノ主君無ク、下饑寒号泣ノ

眷累有り。迺チ講惟ノ垂ル所処、從游ノ士雲集風翕スト雖トモ、然モ亦衆ノ烏合聚散定リ無クシテ、束脩ノ入ル所口、時ニ糊口生活ニ瞻タラザレハ、則チ衣食ニ奔走シテ、寧居底止有ル莫シ。所以テ撰述ノ事ヲ無ント雖トモ、而カモ顧テ夙志ノ醜滿ニ艱ムニ憾ミ有り。一ヒ我カ質ヲ委シテ雲藩ニ官スルニ暨ンテヤ、仕進ノ日浅ケレハ則チ祿薄クシテ、班資モ亦卑キハ固ヨリ其分ナリ。

門弟からの束脩（謝金）が定かに入らず生活の困窮ぶりが伺える。これが享和3年（一八〇三）、61歳にして松江藩の招聘に応じた理由であろう。3月19日に招聘が決し、4月に松江へ赴任、5月16日から医書の講義を始めた。二十人扶持、御医師並に遇せられたが、「特聘医学教授」と自称するほどには高くなかった模様である。同年秋に『穴法記聞』A本を著している。

文化11年（一八一四）10月16日、次男周平を京都の医師久保春塘へ養子に出している。文政元年（一八一八）9月9日に『黄帝内経抄略』序文を草し、天倫寺過去帳によれば三年後の文政4年1月29日に没した。

枰園齋居士 文政四辛巳年正月念九日 山本安良父、逸記7、濃州之人

享年は78歳。『烈士録』に2月1日というのは、藩へ届け出た日付けであろう。

なお、過去帳には次の記事も見えている。

杏山道林信士 天保二辛卯年九月二日 山本周才7

二男周平と名が類似するから、逸記の子の一人であったかも知れない。

## 2 二代 山本安良

逸記の跡を嗣いだのは山本安良である。名は良阜、字は景岐、鷗寮と号した。『烈士録』の記事は次の通り。

二代目 山本安良 生国山城

一 文政四辛巳三月廿三日、父遺跡拾五人扶持被下候。御医師並被仰付。且又、逸記通医学教授被仰付。往々御用立様、家業可令出精旨被仰付。

一 天保五甲午年二月五日、十二年以前未年、江戸表御上屋敷御類焼ニ付、寸志於申出ハ御受納可被遊由被仰出付而、寸志申出候処、神妙之事ニ被思召旨被仰渡候。

一 天保九戊戌年十二月十六日、為百姓食延、山海産物選被仰付処、速ニ書出。仍為御褒美式百疋被下候。

一 同十二辛丑年十月十四日、医学館教授被仰付。毎歳銀七枚充被下候。

一 弘化三丙午年正月八日、於出雲乱心自滅。

35年もの間存濟館で医学教授を務めたにしては記事が少ない。

『日本教育史資料』巻五にも記事がある。

天保十一年正月山本安良ノ世ニ通学生ノ便ヲ謀リ、北堀町藩士三嶋儀右衛門第宅ト交換ヲ命シ、該書院ヲ学館トナシ、門長屋ヲ書生塾トス（是ヲ藩立医学学校設立ノ始トス可キ歟）。翌年館内ニ文庫ヲ建築シ、以テ藩蔵ノ医書ヲ納ム。

佐野正巳氏は安良の業績として天保9年（一八三八）の藩命による救荒書編纂を挙げておられる。東大史料編纂所に複本があるらしいが筆者未見のため、佐野氏の著書に従って記す。本書の刊行は天保10年5月で、書名を『喰延食品』といい、木次町の目代、和三郎なる人物によって刊行されている。収めるところは、山草17種、野草33種、水草9種、海草18種、穀類3種、山木類38種、茸類10種、雑類4種の計132種の食法を記したものである。飢饉対策であろうが、実用に役立ったかどうかは不明である。

父逸記の『穴法記聞』B本を加筆、編集し、逸記の説によって『黄帝内经抄略』を纏めたことは既に述べた。その他、『国書総目録』に載る旧松江市立図書館の『出雲風土記物産解』一冊はその収蔵書を引き継いだ島根県立図書館には現在見当たらない。同じく山本景岐自筆の『麻由美乃事書』（天保10年）が旧村野文庫にあったらしいが所在不明である。

杏雨書屋に熊胆の鑑別法や効能に関する諸説を集めた館良阜の『熊書』（久末迺布美、天保10年成）がある。表紙に「鷓寮先生譚／熊書 全」として、本文と共紙に同筆で「久末迺布美 上下二冊」と記した元表紙が備わる。上冊の内題には、

久末迺布美上ノ冊

芦松木ノ深山ノ久末ノキノ事ヲヲシイフナエニクマモオトサテツ、ル此布美

鷓寮先生医史源館良阜

下冊の内題には、

久末迺布美下ノ冊

深山辺ノ深雪シキ／＼イヤフルカ上ニサツヒトノル久末ノキノイサヲシソオモフ

鷓寮医史源館良阜

とある。下冊には『西游後編』記事の考証が補遺として加わる。巻末に跋文がある。

予既ニ久末迺布美ヲ著ノ其条補遺マテニ及ヒヨレハ、其事既竣レルカ如シ。シカルニ条々再檢スレハ、猶未タ  
尽サ、ルモノアルカ如シ。究竟坐覺授業匆々擾々<sup>?</sup>、次此事ニ及ヘル故、其遺脱缺失亦其分ナリ。<sup>??</sup>事  
努蝟集ノ吾力ヲ此編ニ専ニスル事能ハサレハ、忍ンテコレニテ其業ヲ了シ畢レリ。他日諸書ノ次事ノ久末ニ関  
スル者ヲ得ルニ値ハ、随テ抄シ、随テ此ニ収メント欲ス。ヨテ予カコノ志ヲ此ニ書ノ以伝フト云。

皇天保十年歲己亥三月十五日記于雲藩官寓之学不厭教不倦所

濃国鷓寮察医史

花押

右の書に引用されているのは、

本草綱目、本草綱目啓蒙、和漢三才図会、大和本草、本朝食鑑、本草和名、用藥須知、三国通覽、西遊記後編、東遊記、広恵濟急法、熊志

などで『本草綱目』を除けば和書に限られる。

家学としての医学・本草学を別にして、安良は漢詩に関心が深かったことを三代泰淵（良臣）編『鸚寮先生百絶句』（杏雨書屋蔵、文政11年序）序文が述べている。

鸚寮先生百絶句序

家君鸚寮先生夙以才敏名轟京師第以其志在文章大業富於著述故也至若詩藻視為未技毫不介意然而十歲在右既已善詩雖以独学無師旁僅及之人亦称其卓絶焉及後從大父官雲藩也以任亦在医学教諭故曰坐巽舍授徒而懈而詩藻之技稍就荒棄然亦無值登山臨水之適門好宴私之晤節序放学閑時一為之亦唯托与遺懷故不論格調不屑擬議有時乎肖乎四唐焉有時乎類乎宋元焉而豪宕而險奇而纖巧而平坦非復一軌此其志別有在之致然而先生之所以為先生也要亦在茲其詩不故曰乎無抑元明唐宋格興情々感觸成詞可以見已今者飯塚西山二先生謁予編先生百絶句且作其序因直書是事使其弁其首戊子冬日館良臣識

安良が詩作を好んだことは、泰淵（良臣）の『雲州採葉記事』（杏雨書屋本）の天保15年4月21日付「古体詩一篇充採葉記事序言」や、採葉のたびに贈った数首の漢詩にも現れている。序言末に「良阜時患眼不能揮灑」とあるものの、その年の5月13日に良臣らと松江郊外を採葉し、6月5日には意宇郡玉造（現玉湯町）大谷に至り、6月18日に宍道湖北岸を巡ったのち、8月30日には意宇郡来海枝村（現宍道町）菅原にまで足を延ばしている。総て一日の往復であるから身体壮健であったことが分かる。『雲州採葉記事』は別に翻刻がある。<sup>注6</sup>

後年の刊行に係る剪淞吟社編『出雲詩綜』卷三（大正8年刊）に制作時期不明の七言絶句六首が収録されている。<sup>注6</sup>

山本鸚寮

名良阜字景岐松江藩学存濟館教授尤精本草兼葭堂深推

服鸚寮每寄書質疑壽永年間没著有出雲風土記物産考

良臣兎将為龍山觀楓之游因憶及予垂髫時旧事賦此以示五首

髻齡憶昔在京都、負劔探楓鷹峽趨、同遊諸伴並星散、独記文昌田大無  
鷹峽賞楓天下選、形勝最推地蔵院、深溪俯瞰蘸斜曛、猩血慢帳幾千段  
柵山植尾相密邇、各有霜楓誇觀美、湍声瀟々石梁長、紫翠深頭香閣時



錦楓拗得各肩婦、路出花園妙心寺、要叩色空空色端、寺門本不立文字  
歌呼相答步遲遲、郭門夜市人半定、婦家空夢滿山紅、匹似宿醒猶未醒

朔君美將拉良臣兒觀葉龍山憶予兒時高雄之遊賦此為贈

送君觀葉入龍山、憶我曾游鷹峽灣、衣錦昼行非我分、期君詞藻存爛斑

どのような資料に基づいたのか、「嘉永年間没」は明らかな誤り。また、「兼葭堂深推服鷓寮每寄書質疑」が大阪の商人、文化人にして本草学者としても著名な木村兼葭堂（孔恭、一七三六〜一八〇二）との交流を意味するとすれば問題である。兼葭堂が没したのは享和2年1月25日、父逸記の松江藩仕官以前のことだからである。なお、著作の『出雲風土記物産考』は先に触れた『出雲風土記物産解』のことか。  
以上の資料によって安良の事跡を纏めれば次のようになる。

生国は山城、生年は不明。独学ながら詩才を発揮していたらしいが、享和4年（一八〇四）5月、父の松江藩仕官に伴って松江へ移る。泰淵（良臣）<sup>一八〇七</sup>ほか二人乃至三人の男子があった。『烈士録』三代泰淵の弘化5年条に

弟 範蔵、弘化四丁未年十二月九日、炮術就令出精、三人扶持被下。

と見え、天倫寺の過去帳に、

真観道性居士 安政五戊午年 山本泰淵弟<sup>一八三</sup>

とある。後にも触れるが、泰淵が出雲国仁多郡へ採葉した記録『仁多郡採葉記』と『草学疑問』<sup>特</sup>（ともに旧村野文庫蔵、現在は所在不明）を著した山本良佐も安良の子ではなかったろうか。

文政元年（一八一七）に『黄帝内经抄略』を纏め、同4年（一八二二）3月23日、逸記の跡を嗣ぎ、一五人扶持御医師並に遇せられ、以後35年間存濟館で医学教授に携わった。時期は不明だが、『穴法記聞』B本を成したのも家を嗣いでからのことであろう。天保9年（一八三八）秋、藩命によって救荒書『喰延食品』を著し、翌年5月に刊行された。同年3月には『熊書』の稿成り、同年中に『麻由美廼事書』も成った。天保11年（一八四〇）正月、屋敷替えにより北堀町三嶋儀右衛門弟宅へ移り、書院を存濟館として門長屋に書生を住まわせ、本格的な医学学校の

体裁を整えた。翌年、館内の文庫に松江藩所蔵医学書の管理が委ねられる。同年10月14日に医学教戒に任せられ、毎年銀七枚が加給された。天保15年（一八四四）、京都での修学を終えて帰国した子泰淵（良臣）が採薬行を試みるに際して、その『雲州採薬記事』に序言を寄せ、採薬にも三度同行している。この頃眼病を得ていたようである。弘化3年（一八四六）1月8日、いかなる事情か「乱心自滅」という最期を迎えた。生年不明のため、何歳で没したのかは分からない。

### 3 三代 山本泰淵

安良の跡を嗣いで明治まで存濟館を維持したのは泰淵である。名は良臣、字は徵聖、簡斎と称し、水川とも号する。

『烈士録』に見えるだけでも泰淵の活動は活発である。

#### 三代目 山本泰淵 生国出雲

- 一 天保十二辛丑年十月十四日、家業格別致出精、相弟子中就令世話、為御褒美貳百疋被下候。
- 一 天保十四癸卯年十二月六日、本草学、医学并令出精、身持等茂宜敷趣達御聴、為御褒美銀一枚被下候旨、  
△于時医学為修行奉願在京ニ付、於京都被仰渡候。
- 一 同十五甲辰年四月十八日、在京中自作仕、本草学ニ相懸書籍四拾九卷、差上度旨申出。神妙ニ被思召。仍右品御受納可被遊旨被仰出。
- 一 弘化三丙午年三月十六日、以御憐愍、亡父為遺跡相続、拾人扶持被下候。御医師並被仰付。弥御用立様、家業可令出精旨被仰出。
- 一 同三月廿三日、医学館并医書御文庫共、御預被成旨被仰渡候。
- 一 同四丁未年五月二日、（一八四七）医学教戒被仰付。毎歳銀七枚被下候。
- 弟 範藏、弘化四丁未年十二月九日、（一八四七）炮術就令出精、三人扶持被下。

- 一 嘉永<sup>一八〇</sup>三庚戌年八月十六日、就令出精、拾五人扶持被成下。
- 一 同六<sup>一八五三</sup>癸丑年三月廿九日、医学教授就令出精、御医師被仰付。
- 一 安政<sup>一八五五</sup>三酉辰年十二月廿二日、御隱居様以思召天助御紋御羽織一被下候。
- 一 同四<sup>一八五七</sup>丁巳年六月朔日、就令出精式拾人扶持被成下。
- 一 同六<sup>一八五九</sup>己未年三月五日、江戸勤番被仰付。支度次第可令出立旨被仰渡候。△同四月、參着。文久元酉年三月、帰▽
- 一 同十一月四日、御隱居様御側医格被仰付。
- 一 同日、御隱居様御手自、葵御紋御羽織一被下候。
- 一 同七<sup>一八六〇</sup>庚申年三月廿七日、来酉春迄、詰越被仰付。
- 一 万延<sup>一八六〇</sup>元庚申年十二月廿九日、御用向出精就相勤、為御褒美、於森林御殿、三百疋被下候。
- 一 同日、日々罷出、格別就骨折別段、為御褒美、於森林御殿、二百疋被下候。
- 一 文久<sup>一八六〇</sup>元辛酉年六月廿一日、当秋江戸勤番被仰付旨、於御次被仰渡候。△同九月、參着。同三亥年五月、帰▽
- 一 同十二月廿九日、御用向出精就相勤、為御褒美、於森林御殿、三百疋被下候。
- 一 文久<sup>一八六〇</sup>二壬戌年七月九日、御用向出精就相勤、為御褒美、於森林御殿、三百疋被下候。
- 一 同八月十四日、来亥春迄、詰越被仰付。
- 一 同十二月廿六日、御用向出精就相勤、為御褒美、於森林御殿、三百匹被下候。
- 一 同日、御隱居様御容躰之処、出精就相勤、為御褒美、於森林御殿、二百匹被下候。
- 一 同三<sup>一八六二</sup>癸亥年六月廿六日、直指庵様御側医格御免。御病中心配就相勤、加米拾俵被下候。
- 一 同七月廿六日、直指庵様為御遺物、御茶碗、御香盆被下候。
- 一 同七月廿九日、直指庵様御道具之内、御根付、時計一、殿様以思召被下候。
- 一 慶応<sup>一八六五</sup>元乙丑年八月二日、医学教授被仰付置ニ付、表御医師上座ニ被仰付。毎歳銀三枚増被下候。
- 一 同八月十六日、五拾六歳罷成処、嫡子泰肅先達而令病死、嗣子無之ニ付、養子之儀奉願処、家業相統仕者

相撰養子可奉願旨被仰出。依如奉願、森山文忠二男養子被仰付。

一 同四戊辰年三月十五日、近来夥敷御入費多、御支配向必至之御難涉致恐察、年々御扶持方之内、現米式俵<sup>一八六</sup>差出度旨申出之趣、達御聽処、神妙之至、御満悦被思召候。可被任申出旨、御意之趣被仰渡候。

一 慶応四戊辰年八月八日、此度朝廷江御献金就被遊、助力之儀被成、御頼金壹両壹歩、寸志上納仕処、不顧差問、速ニ致出金段、神妙之至、御満足被思召旨、御直ニ被仰渡候。

泰淵の生年は慶応元年8月16日条の「五拾六歳罷成処」から文化8年（一八一〇）と判明する。

### 3-1 襲家以前

文政11年（一八二八）、泰淵19歳の時に『鷄寮先生百絶句』（既出）序文が書かれた。天保12年（一八四一）に「家業格別致出精、相弟子中就令世話」として褒美を得た。既に父安良の医学教授を補佐していたのであろう。

『烈士録』天保14年と15年の記事は、泰淵と本草学との関わりを示す点で重要である。天保14年（一八四三）12月6日、京都において「本草学、医学并令出精、身持等茂宜敷趣」が藩主に至って褒美を得た。当時泰淵が在京して熱心に本草学・医学を学んでいた証である。翌15年4月18日には既に帰国しており、「在京中自作仕、本草学ニ相懸書籍四拾九卷、差上度旨申出」ている。この本草学に関する書籍49巻が今日杏雨書屋などに残る書籍に相当するのであろう。泰淵の京都修学に関しては安良の『雲州採薬記事』序言<sup>序言</sup>にも言及がある。

吾家徵聖児（中略）遊京輒領恩命嘉、投袂于征客三歳、緒鞭之学就良師、枕警股錐極勉勵、翩然帰米松江溜「投袂于征客三歳」とあるから、天保13年から15年にかけて、泰淵33歳から35歳の間である。在京中に「自作」したと思われる書のうち年記を有するものを次に掲げる。

天保13年6月 『本草自為』草部之初帙（杏雨書屋）

〔内題〕本草自為／雲藩簡齋山本良臣徵聖述

〔識語〕通計品数二百七十六天保壬寅六月下漣至于此書之京下客寓廳下

初秋

『蘭山翁採葉記』(杏雨書屋)

\* 「雲藩茶梅園蔵」用箋

〔序〕

此冊蓋蘭山小野翁嘗蒙台命採葉乎東方諸州每種詳審和漢品名且旁記方言以示之同学欲以闡他之嫌疑故冊中不華文不飾言其衷心丁寧可見矣若後学余輩者豈可不欽戴之乎今此請礼于亡羊山本翁而謄写之翁為余所許諾無堪欣喜勉力不置業終卒也時天保壬寅之初秋京師客寓 雲藩簡齋館良臣誌

9月

『本草自為』草部之二帙(杏雨書屋)

〔内題〕本草自為／雲藩簡齋山本良臣徵聖課

〔識語〕右通計二百六十三種天保十三年歲在壬寅九月下澣穀且真写至此書之乎京下西洞夷川之寓舎

11月

『秘伝花鏡釈義』(杏雨書屋)

\* 「雲藩茶梅園蔵板」用箋 医学館蔵書印「松江医籍之記」印有り

〔内題〕秘伝花鏡釈義／亡羊山本先生講述／出雲藩簡齋山本良臣徵聖録

〔識語〕秘伝花鏡釈義大尾 天保壬寅十一月終業

14年春日

山本錫夫著「漳州府志産物和各」(松江日赤医学図書室)

\* 「雲藩茶梅園蔵板」用箋

〔識語〕天保癸卯春日 榕室山本錫夫識／右寓京之日謄録諸西洞夷川南之僑居窓下云

癸卯二月簡齋山本良臣徵聖氏

7月

『本草自為』草穀菜部三帙(杏雨書屋)

\* 「雲藩茶梅園蔵板」用箋

〔内題〕本草自為／雲藩簡齋山本良臣徵聖課

〔識語〕通計二百七十七種 天保癸卯七月朔日終業

安良のいう「楮鞭之学就良師」の「楮鞭之学」とは本草学の異称、「良師」とは右に「亡羊山本翁」「亡羊山本先生」と見えるように、小野蘭山なきあとの京都における本草学の第一人者であった山本亡羊(世孺、一七七八〜一八五九)である。その亡羊の講述を筆録した次の書も同じ時期のものであろう。総て杏雨書屋所蔵本である。

『救荒野譜積義』

\* 「雲藩茶梅園蔵板」用箋

〔前半内題〕救荒野譜筆講／亡羊山本先生講述／出雲藩山本良臣徵聖録

〔後半内題〕野譜補遺筆講

『救荒本草積義』

\* 下卷の一部に「雲藩茶梅園蔵板」用箋。一部が「良臣」の筆跡。

〔内題〕救荒本草記聞／亡羊山本先生口授 男篤慶仲錫筆録

『爾雅名物積義』<sup>注13</sup>

\* 厚手の「雲藩茶梅園蔵板」用箋

〔内題〕爾雅積義／亡羊山本先生講述／出雲藩簡齋山本良臣徵聖録

『詩經名物弁解積義』

\* 「雲藩茶梅園蔵板」用箋

〔内題〕詩經名物弁解積義／亡羊山本先生講述／出雲藩簡齋山本良臣徵聖録

『大和本草積義』

\* 「雲藩茶梅園蔵板」「雲藩茶梅園蔵」用箋

〔内題〕大和本草積義卷一／亡羊山本先生講述／出雲藩簡齋山本良臣徵聖録

『本草綱目積義』

\* 「雲藩茶梅園蔵板」用箋

〔内題〕本草綱目積義／亡羊山本先生講述

〔本文冒頭〕本草綱目積義／出雲藩簡齋山本良臣徵聖録

『天保一四年歲癸卯五月念一日読書室物産会品物』

\* 「雲藩茶梅園蔵」用箋

〔本文冒頭〕雲藩館良臣考録

本草学に関する諸説を自ら集めた『本草自為』（七卷七冊、六・七巻は後年のもので、採葉行によって知り得た知識、出雲方言を記すことが多い）もあるが、写本・筆録本を含めて「自作」と称して存濟館の文庫に納めたのである。書名下に注記したように、在京中の書には「雲藩茶梅園蔵板」「雲藩茶梅園蔵」用箋を用いることが多い。「茶梅園」の意味は未考である。

次の書もこの時期と思われる。

『草学漫抄』(松江日赤医学図書室)

\*「雲藩茶梅園蔵板」用箋

〔内題〕草学漫抄第一帙／出雲藩簡齋山本良臣徵聖編集

一冊のみの自筆稿本で、全49紙のうち墨付23丁、あとは白紙のままである。各書からの引用記事に「良臣曰・良臣案・臣案」として私解を加えている。

右と同名書は杏雨書屋にも存する。元三冊であったものを合綴したものである。

①草学漫抄第一帙 \*木口「本草々籠」

出雲藩簡齋山本良臣徵聖編集

②(書名不明) \*木口「藜園触目 壹」

抜書集(桃洞遺筆、茅窓漫録、世事百談、閑田耕筆など)

③(書名不明) \*木口「藜園触目 貳」

雑録(風説類、狂歌、狂詩など俗事に関するもの)

帰国した泰淵は修学の成果を实地に験すべく、天保15年(弘化元年、一八四四)4月15日、門弟4名とともに島根郡望楽山(枕木山)への第一回採葉行を試みる。同年中に12回、翌年に5回、弘化3年に3回で計20回にのぼる。仁多郡へ赴いた第12回を除き総て一日の行程ではあったが、医学校の生徒らを伴い、時には父安良の同行があった。同行者の最も多かった第4回島根郡水浦(御津)採葉の顔触れは次の通り。

秋庭良貞、高橋春常、田代文泰、祖田立益、熊谷文慶、平山文礼、伊藤杏仙、伊藤香山、中沢秀圭、坂根春生、上巳上ハ医員倅タリ、中川玄意、星野貞白、渡辺楊亭、天野文理、中溝玄丘、安立寧一、竹谷達美、和田文栄、高橋俊昌、中山良宅、錦織顕良、福島健中、高橋文会、井川久太郎、中塚光次郎、坪内春洞、古川弁貞、佐々木文齡、木村玄碩、長廻良察

官医の子弟、市医ら31名が従ったのであるから、安良が詩を贈って斯学の発展を喜んだのも当然であろう。この採葉行の記録が『雲州採葉記事』(原題は「採葉記事」)である。写本が岩瀬文庫と杏雨書屋註とにあり、内容

が相当異なっている。杏雨書屋本にのみ備わるのは、父安良の序言、安良から贈られた漢詩、泰淵と門弟らの漢詩、第8回以降の採葉記録、そして方言を含む朱筆の和名記事である。杏雨書屋本は「雲藩医学館蔵」、岩瀬文庫本は「読書室蔵」用箋を各々使用する。「読書室」は山本亡羊の書齋名である。岩瀬文庫本冒頭に「雲藩医学助教簡齋館良臣徵聖譚」（杏雨書屋本「簡齋館良臣徵聖譚」と自らを「助教」と称しているから、泰淵が家を嗣ぐ前に採葉記録の一部を清書して師亡羊に送ったのが岩瀬文庫本の元本であろう。ただ、同本巻末の識語「雲州松江医学館教授／山本安暢識／後改譚大名良臣号氷川」が些か問題となる。最後の「名良臣、号氷川」からすれば泰淵自身の識語らしいが、「後改譚大」の意味が不明な上に、泰淵が「安暢」を名乗った証もなく、「医学館教授」も冒頭の「医学助教」と符合しない。後年の補筆であろうか。このように岩瀬文庫本には成立の経緯に不明の部分がある。これに対して、杏雨書屋本の泰淵自筆稿本であることは確実である。本書は別に翻刻があるから内容については割愛する。

なお、第12回の仁多郡への採葉行は、9月5日発、12日帰館と例外的に長い旅行であったが、その記録は「所得品物多シ。蓋シ別記行ノ在ルアレハ此タニ載セス」として記載がない。『国書総目録』が旧村野文庫蔵として載せている山本良佐『仁多郡採葉記』がこの「別記行」に当たると思われるが、現在は所在不明となっている。良佐には『草学疑問』（旧村野文庫）なる書もあったらしい。

採葉を行う一方で、存濟館では講義も行った。

『毛詩群類講義（詩経名物釈義）』（杏雨書屋） \* 「雲藩医学館蔵」用箋

『元表紙』弘化乙巳正月就業／詩経名物釈義

〔内題〕毛詩群類講義／簡齋山本良臣徵聖学 \* 四三丁「詩経名物釈義卷二」

〔識語〕右釈義之業脱稿、則在弘化歲在乙巳四月之晦為諸子講読諸学堂者始業于同年二月終講乎其五月初

初漸矣猶加追考而欲公之於世云？ 簡齋館良臣誌

弘化2年（一八四五）1月から4月晦まで毛詩（詩経）中の動植物名の考証に関する講義案を草し、講義は2月から5月初旬に及んだ。同年2月には次の書を成した。



『古今蘭草弁誤』(杏雨書屋)

註行

\*「雲藩医学館蔵」用箋

〔内題〕古今蘭草弁誤 附和漢品類／雲藩氷川館良臣徵聖著

〔跋文〕良臣曰(中略)予嘗テ京師ニ客在ノ草学ニ暇勉セシ日、彼土ハ言マテモナク、撰ノ池田郷ハ一郷十三村花戸其半ニ過クト云、ナトニモ遊歴メ、泛ク草木ヲ尋索セシヲアリ。(中略)皇国ニ生スルモノ他品ハ姑クオキテ論セス。草木ノミモ幾万ヲ以テ計フヘシ。我カ出雲国中ニ生スルモノヲ概算スルニ、殆ント三千種斗ナリ。サレハ物産ハ洪大無量ノ事業ト云フヘシ。偕夫儒ハ天地人ノ理ニ通シ、天地間ノ物ヲ知ルヲナレハ固ヨリ学フヘク、医モ亦藥品ノ真偽ヲ弁セサレハ民瘼ヲ濟救スルヲアタハサレハ此レ亦本業ニ并ヘテ従事スヘキヲ勿論ナリ。(中略)偕世人屢蘭花ノ品類等ノ事ヲ就テ質問スル者アリ。予医学教授ニ暇ナク、草学考究モ亦孜々トノヤムヲナシ。聊力補助スルモノナク、晨夕ノ務最モ忙劇ニメ、一タソノ問ニ答フルニ堪エカタクニヨリテ、コトサラニ此編ヲ著ハノ広ク之ヲ世ニ示スト云フ

皇弘化二年乙巳之春日 雲藩北濠賜宅ノ簡齋中ニ書

方言記事「ホクロラン 出雲ニテ俗人ハイコリト云フ」(10オ)「芄蘭 詩経 和名ガヰイモ パンヤ出雲方言」(15オ)を含み、本草学のうち草木に関する分野を「草学」と称しているのが注意される。

### 3—2 襲家以後

弘化3年(一八四六)1月8日、父安良の「乱心自滅」の後、暫くあって3月16日に相続が許された。「以御憐愍」とあるから特別の計らいがあったものか。泰淵37歳のことである。御医師並、一〇人扶持と初代逸記のときは半減している。同年3月23日、存濟館の医書、文庫の預りを委ねられ、4月9日に次の書を写している。

『隠岐国産物絵図註書』(島根大学附属図書館桑原文庫)

〔識語〕丙午初夏十八日謄写之簡齋東窓下斯日暄晴舒夏氣愴悠揚學

堂生徒来登今将就返講之業乎柳予之声既催出勤云館良臣漫題

对梧即唵

杜鵑君か音信きかまほし

晒正

宮内庁書陵部の良臣自筆『鷹書集遺』にはこの年から嘉永3年までの記事があるらしいが未見である。この年の8月28日の星神山への採葉行が『雲州採葉記事』の最後の記録である。公務多端となったのであろう。

弘化4年(一八四七) 5月2日、医学教戒に任ぜられ、毎年銀七枚が加給になった。同年12月9日、弟範藏に砲術の知識をもって三人扶持が給された。嘉永3年(一八五〇) 8月16日、精勤の功により一五人扶持に加増され、続いて嘉永6年(一八五三) 3月29日には御医師並から御医師と格上げになった。

安政2年(一八五五) 夏に次の書がある。

『物産書籍品目叢覧』(杏雨書屋) \* 『雲藩茶梅園蔵』用箋

〔初・次帙〕 出雲藩簡齋山本良臣徵聖叢

〔末帙〕 水川史逸山本良臣徵聖交編輯

\* 末帙貼紙「乙卯夏記籍」

「救荒本草・秘伝花鏡・本草綱目」など中国の本草書などからの抜書三冊で、末帙の貼紙に「乙卯夏」とある。「雲藩茶梅園蔵」用箋を使用している点は京都修学時代の著作と同じだが、末帙は署名「水川史逸」が異なる上に白紙が多く松江で継続を試みて中絶したものと見える。

安政3年(一八五六) から七年後の文久3年(一八六三) まで、『烈士録』にはしばしば前藩主齊貴(直指庵) に関する記事がある。安政3年12月22日に「天助御門羽織」を授かり、同6年(一八五九) 3月5日に突如「支度次第可令立旨」として江戸勤番を命ぜられ、4月から二年間江戸にあった。同年11月4日には御隠居様御側医格となり、直指庵手ずから葵御紋の羽織を拝領し、翌万延元年(一八六〇) 12月29日には、森林御殿(齊貴の江戸隠

居屋敷名)から「御用向出精就相勤」「日々罷出、格別就骨折別段」と二つの理由で褒美を得ている。齊貴は文久元年(一八六一)頃に桂川甫周『和蘭字彙』のほか大量のオランダ書註を購入するなど西洋趣味の大名として知られるが、泰淵が洋書購入に与ったかどうかは不明である。文久元年3月に一度帰国したものの、6月21日には秋からの江戸在勤が再び命ぜられた。この度は齊貴の病のためらしく、文久3年3月14日に齊貴が没するまで2年間江戸に留まり、再三にわたって森林御殿から褒美を得ている。5月に帰国、6月26日に御隠居様御側医格を免ぜられるに際して一〇俵の加米を得、7月26日、29日には遺品を拝領している。「殿様以思召」とあるから一通りの恩顧ではなかったであろう。

安政4年(一八五七)成の『鷹百句賤註』が宮内庁書陵部にあるらしいが未見である。この年の6月1日に再度加増されて二十人扶持となった。喜びの反面、翌5年には弟を亡くしている。天倫寺過去帳に

真観道性居士 安政五戊午年 山本泰淵弟

とある。江戸滞在中の万延元年に次の書を著した。

『石菖編』(家蔵)

〔自序末〕 皇安政五年歳在戊午十二月〔?〕 山本良臣徵聖父題

〔内 題〕 石菖編／鬻溪漁逸 纂輯

〔附 言〕 漁逸謂ク、此書ノ編述、実ニコレ戊午ノ窮冬ニアリト雖モ、医学課業違アキアルヲナキヲ以テ、遂ニ其稿ヲ脱スルヲ能ハス。此ニ由テ、己未ノ春、遅日ノ閑余ヲ候テヨク其業ヲ終ンテヲ庶幾セシカ、其春凶ラス此上ニ〔?〕役ノ特命ヲ負テ、只其事ヲ修スルニ由ナケレハ、更ニ其稿ヲ合せ〔?〕シテ、官齋勤務ノ罅隙アラシク、其宿志ニ酬ヒンコトヲ欲スルモ、只己巳星光一年ヲ経タリ。而ノ嗣後葛氏ノ求、尺書ノ信毎ニコレニ及ハサルヲナシ。今ヤ義ニ於テ黙止シカタケレハ、近時寸間些暇、一ニ此ニ従事シ、日ヲ積テ漸ク爰ニ脱稿終業スト雖モ、実ニコレ繁務草劇ノ暇ヲ偷ミ、加之、旅寓書籍エ匱シケレハ、旁以テ考證檢索ヲ缺テ、滿意ノ

纂述ニアラサルヲ懸トナス。然レモ、瑣々ノ水冊、徒ラ二年月ヲ復スルヲ、前言ノ如ク固ヨリ予カ志ニアラス。今姑ク之ヲ編録シテ、以テ其責ヲ塞クモノ、ミ。若其初校大成ニ至リテハ、コレヲ後日ノ業ニ譲ルトイフ。万延紀元庚申夏日、江都今溪邸舎寓樓ニ識。

「鷲溪漁逸」という称も珍しいが、本書の重要性は附言の記事にある。実をいえば、数多くの著作を遺した簡齋山本（館）良臣が松江藩医学学校と深く関わる人物であることはこれまで紹介した資料から明らかであるものの、『烈士伝』に載る泰淵と直接には結びつかず、筆者は長らく別人と考えて調べを進めていた。両者をほぼ確実に結びつけるのがこの資料なのである。

附言によれば安政5年（一八五八）暮れに本書編述を始めたが「医学課業違」なきゆえに脱稿に至らず、翌6年春も「其春図ラス此上ニ<sup>?</sup>役ノ特命ヲ負」ったため果たせず、万延元年（一八六〇）夏に何かと不自由な旅先の江戸で漸く脱稿したという。この安政6年春に良臣が「図ラスノ特命ヲ負」った事実が、同年3月5日に突然「支度次第可令出立旨」と江戸勤番を命ぜられたという泰淵の記事と重なるのである。泰淵の江戸滞在は1年間の予定であったが、翌安政7年、即ち万延元年春になって1年延長されたために、泰淵はその夏には確かに江戸在勤中であつた。これによって簡齋山本良臣が山本泰淵と同一人物であることが明らかになる。なお、著作に「泰淵」の名が一度も使用されたことがない理由は分からない。

天倫寺過去帳によれば、元治2年（一八六五）には家族の不幸が続いている。3月16日に嗣子泰肅を、4月5日には孫娘（泰肅の子か）を失つた。

旭窓院良図貽孫居士 元治二乙丑年三月十六日 山本泰淵倅

惠泰童女 元治二乙丑年四月五日 山本泰淵孫

改元があつて慶応元年の8月16日、泰淵は嗣子なき故をもって森山文忠二男を養子に藩へ願ひ出、認められた。これ以後泰淵にまつた著作はない。ただ、松江日赤医学図書室に所蔵される神田玄泉著『日東魚譜』（題箋「日本魚譜」、四卷三冊、第二巻欠）第一巻欄外に「丙寅秋月良臣氷川父考定」（一オ）として書込がある。

溪鯤 良臣曰、ワカサキ、雲俗アマサキ。大明一統志ノ公魚也。溪鯤ハ漳州府志為香魚一名。(4ウ)  
鱒魚 良臣曰、和名ハエ。ヤナキハエハ一種ノ名ナリ。サクライヲト云名未詳。(同右)

巻一に計40例あり、泰淵の自筆である。「丙寅」は慶応2年であるから、晩年に至っても本草学への関心は失われた訳ではない。

泰淵に関する最後の資料は天倫寺過去帳である。

氷川院良臣徵聖居士 明治六年十月五日 山本鷗寮<sup>1</sup>

父安良の号「鷗寮<sup>1</sup>」があるのは不審だが、何らかの誤りと見れば、山本家三代泰淵は明治6年(一八七三)、64歳で没したことになる。

存濟館は明治3年まで存続したというが、同年には松江市殿町に西洋医学を中心とする藩立病院が設立され、医学校が併設された。本草学とともに泰淵の時代も過去に属することになった。ただ、開設当時の病院の職員名簿<sup>註</sup>には、泰淵と採薬<sup>採</sup>行をともした「坪内春洞、林柳栄、建田円琳」の名を見出すことができる。

### (補記)

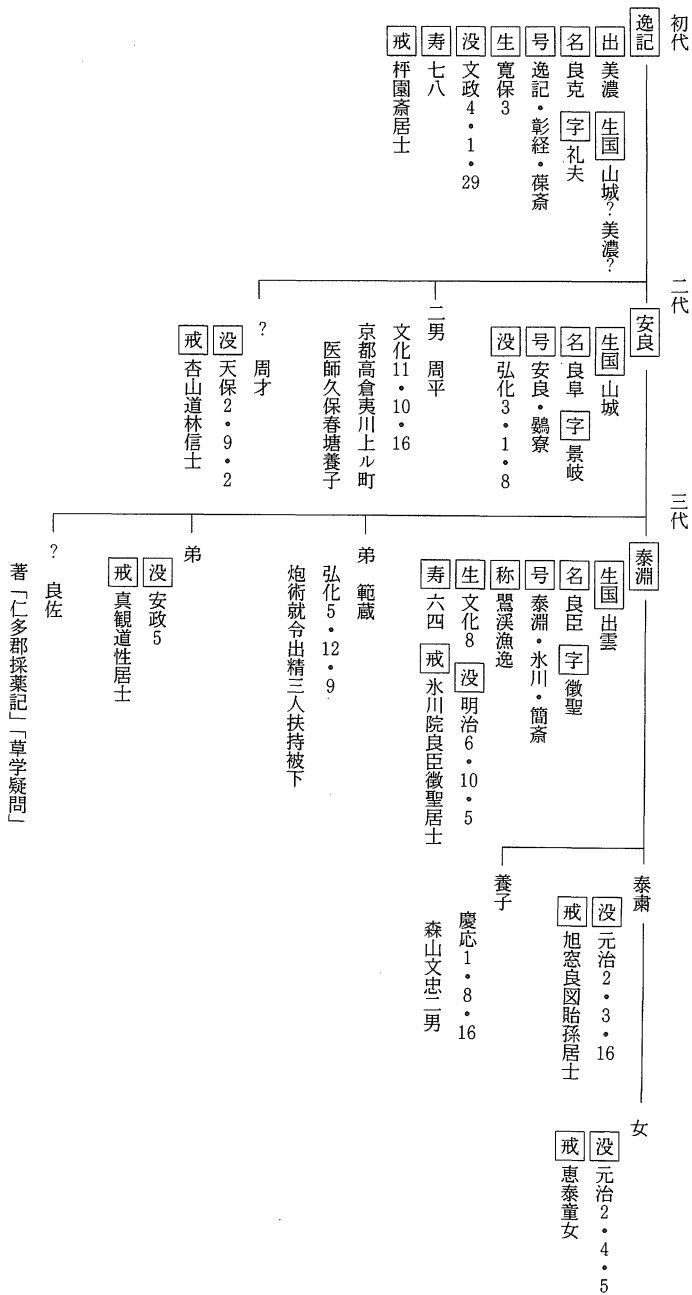
投稿後、東京の古書肆から本居太平著『大同類聚方薬名略解』の新写本(二巻二冊、「宝玲文庫」旧蔵)を入手した。下巻末に次の識語がある。残念ながら自筆本ではない。

此書原出於紫藤園西山氏之手、天保四歲在癸巳、武都客中諸寮同齊先生之命而謄録之、南聡<sup>南聡</sup>下之爾<sup>爾</sup>晚春初九倍子 館良臣勤誌。

また、近刊の『国書人名辞典』第四巻により『朝日日本歴史人物事典』に良臣の記事があることを知った。佐野正巳氏説に従い、新見を加えているが、不備や誤りも存する。

# 4 山本家系図

山本家（別姓「館」）



本稿は平成8・9年度科学研究費助成金(基盤研究(C)(2))「近世本草書の方言記事に関する調査研究」による研究成果の一部である。紙幅の関係で個々の文献について詳述することはできなかった。調査に際して武田科学振興材団杏雨書屋、松江日赤病院医学図書室、京都大学中央図書館など関係文献の所蔵当局には種々便宜を計らっていただいた。お礼を申し上げる。

注

- 1 「雲州採葉記事」島根大学法文学部紀要『島大言語文化』4号。平成8・9年度科研報告書『近世本草書の方言記事に関する調査研究』(平10・3)再録。
- 2 『松江藩学芸史の研究』319頁
- 3 小野蘭山は寛政11年(一八九九)3月に幕府の招きに応じて江戸へ下った。
- 4 『松江藩学芸史の研究』321頁
- 5 注1に同じ。
- 6 島根県立図書館司書北村久美子氏の教示による。
- 7 「草学」の語は泰淵(良臣)にも使用例があるが、一般には流通しない語である。
- 8 注1に同じ。
- 9 「雲州採葉記事」の記載形式は小野蘭山の採葉記に倣ったと思われる。
- 10 木口に「簡齋叢書之二」とある書名不明の一冊の一部である。山本錫夫は山本亡羊の二男。
- 11 『出雲詩綜』にいうように、安良が京阪の学者と本草学に関して質疑を交わしたことが事実だとすれば、その相手は山本亡羊ではなかったろうか。その縁で泰淵が亡羊門に入ったと考えれば自然である。
- 12 山本亡羊は研究成果を公刊することが少なく、その学問は講義の筆録の形で多く伝わる。その意味では貴重なものである。
- 13 『松江藩学芸史の研究』325〜326頁に紹介がある。
- 14 佐野正巳氏は松江日赤病院医学図書室所蔵本の中、本書のほか次の三書を良臣関係書とされている(『松江藩学芸史の研究』324頁)。

①『物産音別』一冊(自筆本)

②『薬名指掌』一冊

③『芸海珠塵』一冊

筆者の調査によれば右三書は同筆で、明らかに『草学漫抄』とは異なる別人の筆跡である。①は薬名を和名のイロハ順に排列して漢名と典拠を示したもの、②は逆に漢名を読みイロハ順に排列して和名を添えたもの、③は中国書の写しで、ともに「雲藩茶梅園蔵」用箋を用いているから良臣に関係ある書であることは間違いない。

岩瀬文庫蔵本については板坂耀子氏の資料を借用した。

注1参照。本稿には「解題」と重複する所がある。

15 『松江藩学芸史の研究』325頁に跋文の紹介がある。

18 この多くは蔵書印「雲藩図書」が捺されて現在島根県立図書館、松江日赤医学図書室に伝わっている。梶谷光弘「蔵書印

から見た藩校の機能について」(島根大学教育学部附属中学校『研究紀要』第38号、平成8年7月)に網羅的な調査結果

が報告されている。

19 泰淵は所謂儒医であって学問としての医学、本草学を教授するのが本務であり、臨床家として脈を取った例は資料には見

えない。『烈士録』文久2年12月26日条「御隠居様御容躰之処、出精就相勤」がどのような勤務内容を意味するのか不明

である。

20 「佐藤潤平蔵書」印のある新写本。独特の癖があって読みづらい。国会図書館にも同名書があるが未見。

21 『島根県医学史覚書』34～35参照。

#### 補注

1 『松江市誌』(昭和16年)は「斉貴と鷹狩」の一節を設けて、松江藩主松平斉貴が鷹狩りを好み、鷹書を蒐集せしめ、藩士に命じて「鷹事記」「鷹布美」を撰ばせたことを記している(524頁)。良臣の著書も斉貴の命に従ったものと思われる。

2 『松江市誌』は斉貴死後の記事に「羽山重樹御用頭書」文久3年7月12日条を引き、山本泰淵が斉貴の生前に御手許金23両(内5両は後に返納)を拝領していたことを記すとともに、泰淵の伝を『烈士録』によって紹介している(532～533頁)。